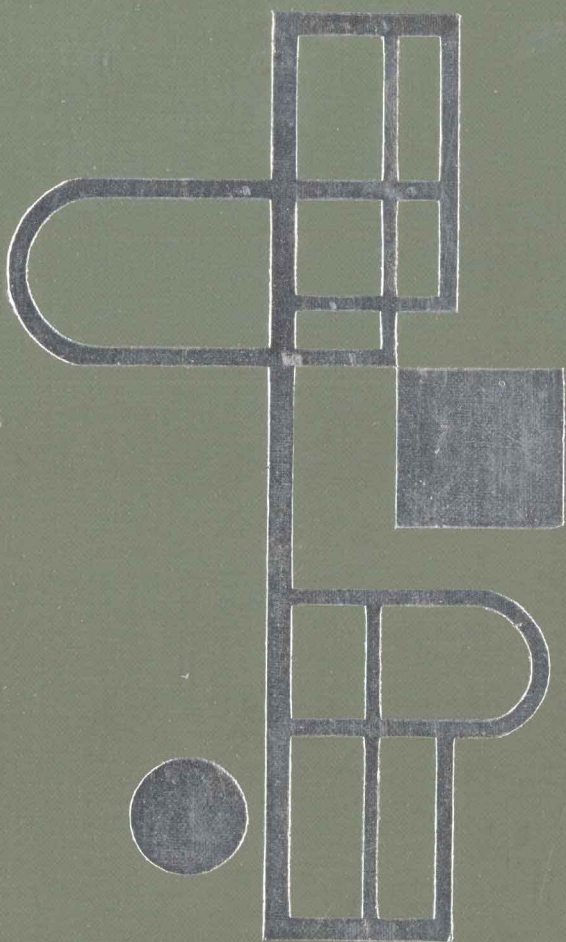
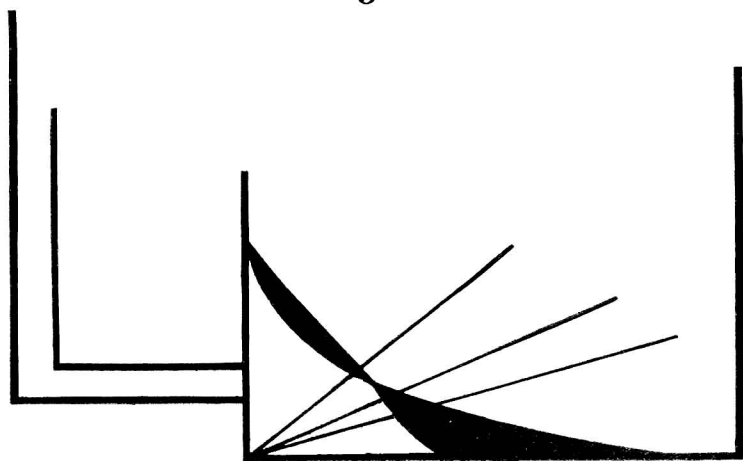




阿部知二 集

新選 現代日本文學全集

9



筑 摩 書 房 版

新選 現代日本文學全集 9



阿部知二集

昭和三十五年二月五日 発行

著者、阿部知二

発行者 古田 晁
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 山田 一雄
東京都青梅市根ヶ布三八五

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

〔電話〕東京二九局(29) 七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

製印整 印刷版 株式会社 精興社
本刷株式會社 精興社
和田製本工業株式會社

阿部知二集 目次

日月の窓	五
あらまんだ	四六
高原にて	二六
城（抄）	二七
黒い影	三四
沈黙の女	三六
思 出	三〇
人工庭園	三二
アルト・ハイデルベルヒ	四二
馬糞記	四七

牢獄と尖塔……………三五四

ヨーロッパ紀行(抄)……………三五四

無念の爪……………小島信夫 四六

解説……………荒 正人 四〇

装幀

恩地孝四郎
恩地邦郎

阿部知二集

一章

1

せまい庭のすみの乙女椿おんなつばきの木の淡紅の花が大きくひらき、その近くの雪柳のしだれた枝は小さな純白の花をいちめんにつけて揺れ、その下あたりでは黄水仙の花の群が午後の日射のなかで光っている。竹井恭吉は縁側の椅子にかけて雑誌を見ている。足もとには白い猫がながながと寝そべっている。つとめている大学の入学試験は数日前におわつていた。今日の夕方には、何千枚という答案を見るといふ仕事をさせられた英語教師仲間が、街で慰労と称して酒をのむことになつており、彼もそこへゆくことを約束していた。しかし、出かけるにはまだ早すぎた。玄関で「速達」という声がして、まもなく年若い女中がそれを持ってきた。京都から妻の敬子がよこしたものだつた。敬子は、親戚の法要をかねて、十八になる娘の真佐子を連れて、数日前から京都の実家に行つていた。封を切つて

みると娘からの便りも入つており、竹井は何とということなしに、それから眼を通した。東京で野育ちに大きくなつた子供に取つては、京都は静かで美しくはあるがお上品すぎて退屈なところでもあるようだつた。できるだけ早く東京に帰りたいが、それでも都踊だけはそれまでに見て、などといつていた。

妻からのものは、用件だけを書いていた。——したしい親戚の、いわゆる「神門清造翁」の三周忌が、数日後に、かなりにぎやかに行われるのだが、妻の手紙も、それについてのものだつた。というのは、身寄のものが相談して、この際に内輪ながらに彼の伝記のようなものを作ることになつたが、二つのことを竹井にいつてきたのである。

一つは、彼にその伝の執筆者になる意志があるかどうかということであつた。これは断るほかなかつた。あまりに近しい関係にあつたことからしても、また物の考え方のちがひからしても、決して適任者ではないと思われた。おそらく京都の人々もそう思つており、本気でいつてきたのではなからう。そのことは、妻の「……竹井氏に頼むべきだなんていつてるのよ」というようなよそよそしい文言にも察しられる。

もう一つは、そのために、手紙とか写真とかいうような資料を集めなければならぬが、本格的に取りかかるのは先のこととして、差しあたり法要の日に、故人にゆかりのある古い写真などを持ち寄つて偲びたいということになつた、

ということである。神戸の旧邸が空襲で焼けて、かんじんの神門家には残るものが少いので、方方の家に声をかけて集めようとしているのである。とくに、翁の生涯のうちでもつとも楽しかつた時の一つとも思われる還暦の賀の折のものが、いちじるしく散佚しているということであつた。家を探してみてもその折のものを取り出し、そのほかにも眼ぼしいものがあつたらとどけてほしいというのである。「……あなたがこちらへいらつしやるのなら持つてきて下さい。それでなければ、伸子さん（東北に嫁いでいる、妻の姉）が、途中で立寄りでもしたらことづけと妻の手紙はいつていた。じつのところ竹井は、その法要にゆくともゆかぬとも決めていなかつたのだが、この言葉のはしばしにも、彼が招かれぬ客に近い存在だということは見えていた。妻の部屋の押入、娘の本箱、彼の書斎の袋戸棚などから、数冊の写真帳と、まだ貼らない新旧のもの入つた一つの紙箱とを探し出して、縁側の明るい日射のなかに持つて出ると、つめたい埃の匂がかすかに鼻を刺した。写真帳は、年代順に整理して貼つていたのでなく、かなり乱雑だつたから、遠い昔のものといふ最近のものとが隣合つていて、奇異な感じをあたえたりした。たとえば裸の赤ん坊の妻の写真と、スキ―をしっている娘の写真とが、ならんでいる。それだから、神門清造の還暦の賀——昭和十四年の春——の写真を見つけるのにも手間がかかつ

た。四通りも五通りもあつたような記憶をもつていたが、二つのものが、別々の帳に見つかっただけだつた。保存のしかたが悪かつたということになる。

一つのは、京都西郊仁和寺裏の神門邸の庭の池にのぞんだ広間の縁側に、神門清造を中心年寄たちが坐り、庭において若いものにならび立つてゐる写真であり、片隅から花のついた桜の枝がのぞいてゐる。

その写真には、神門家の一族郎党というべきものと主な客人と合せて、三十人ほどがうつてゐるが、その日に招かれてきたものの数は、はるかに多かつたというおぼえがある。

そしてその三十人ほどのものの中でも、神門と深志野との両家のものが——すくなくとも竹井に取つては、眼につきやすいのである。もちろんその中心には、神門清造が、ゆたかな体格を紋服につつんで坐してゐる。半白の髪の下顔は、強くはつきりとした線をもつており、眼は大きくあかるく光つてゐる。六十歳の彼はまったく得意である。彼は三十代の半ばになるまでは、四国の方の鉱山技師、はじめての妻との死別、それから東北の山での鉱山経営、その行詰り——一時は自殺をすら思つたこともあつたといわれる——それからようやく這い上つて鉱山の有利な売却に成功し、それから関西のある財閥の後援を得て大阪の近くに小さな軽金属加工工場をつくり、転じて軽金属（アルミニウ

ム）精錬に、その財閥の力に助けられて人つて行つた。第一次大戦は彼の事業を發展させた。もちろん、その後の「満州事変」「支那事変」は、彼がかつて思ひもかけなかつたような繁栄をもたらしした。彼がいまここにこやかに坐つてゐる間にも、飛行機の翼、また、加工工場にまわされては——小銃その他の部品、光学器械の鑄型、兵士たちの飯盒、など戦争にかかわりのあるさまざまなものはどしどしと産み出されて行つてゐる。この日の、この撮影のあとで、彼は陸海軍に一機ずつ戦闘機を献納するという発表をしたが、それにも彼の技術をかたむけた軽金属が使用されるだろう。また昨秋に彼は、優秀な技師をつれて満州にゆき、油母頁岩から軽金属鉱業をおこす企画に参加したが、これもまた彼の勢力と富を増しすすめるばかりのことであらう。

神門清造のとりには、夫人の千代子が坐つてゐる。その時には五十歳に近かつたが、それになつてゐたかだつたが、京育ちの麗質というものであらうか、艶やかな美しさがまだ残り、その華奢な体をすこし夫の方にかたむけて、すがりつくような形をみせてゐる様子にも、幸福感においこぼれてゐる。

この二人のまわりには、おおむね神門夫妻の親戚縁者のうちでの年寄りのものが座を留めてゐるが、その中で眼立つてゐるのは深志野安之博士であり、そのほかの十人足らずの老人については、いまの竹井には強い記憶もなく、また

誰彼とはつきりと見分をつけることすら困難である。——深志野博士は、神門清造よりも二つ年上であり、その専攻は国史であるが、二人は古い高校時代からつづいての親友である。そして深志野の長男一郎は五年前に神門の娘瑤子の婿になつており、またこの日に、——戦闘機献納の報告の後に、次男二郎が神門家の姪の華子と婚約をむすんだということが披露された。深志野は、そのころ二つの大学で講義をし、またしだいに勢が盛んになつた国権思想国粹思想のことについては権威であると見られてゐた。彼の政界や軍部での声望が、神門の事業に対して間接に力になつてゐたといふことは、十分に考えられるところだ。——その深志野の、モオニングをきた長身瘦軀のかげにかくれるように、神門夫人よりはかなり老けて見える夫人が坐つてゐた。

親戚のむれのまわりには、神門の事業関係の人たち、彼の工場の幹部などの何人かがゐるが、その中間の場所あたり、というよりは縁側のいちばん眺のいいと思われるところに、特別の賓客が何人かゐる。市長、それから、神門や深志野が尊信し交誼をむすんでゐる某寺の住職であり、もう一人は彼らが親しくしてゐる高名な日本画家である。もう一人は、わざわざこのために東京からきた元大臣である。それから一人の初老の外人がゐるが、それは神門の会社とつながりのあるアメリカのアルミニウムの某コンツェルンの技師であり、極東視察の帰途に日本に

立寄つて、偶然にこの席に加はるることになつたといふことであつた。ほかに代議士、また背広すがたの高級技術將校などにもいたかも知れない。庭に降りて、廊下の欄などにもたれたり踏石の上にしやがんだりしているものは、大体が次の代のものたちであつた。

神門家の一人娘の瑤子は、三つか四つかの娘瑛子の手を引いて、満開の桜の枝が差し出たかげ——この画面の隅寄りのところに、桜の裾模様の着物をきて、すこし身をかがめてゐる。その夫である一郎は、彼女とはならぬで、少し離れて立ち、遠いところをでも眺めるような顔つきをしている。偶然のことかも知れず、あるいは、もはやこのころに、彼と瑤子との心は、はなればなれになつてゐたのかも知れない。

しかし彼の弟の二郎は、新しい婚約者華子と肩をくつつけて、ちやうど神門夫妻の真下のところに、いきいきと顔をかがやかせて立つてゐる。後年に彼が神門の事業の実力的な後継者になるといふ運命は、この時のこの写真の面にも、あきらかに指示されてゐたようである。

華子の姉の露子は、一人の幼い妹とならんで、二郎から一人置いたところに立つてゐる。彼女は結婚してまもないのであるが、その夫の生月武志は、ここにはおらず、陸軍の参謀として大陸に行つてしまつてゐる。こないだまで北京におり、昨秋神門は満州出張の歸りにそこにまわつて相会したといふことだが、いまは山西の方に行つて共産軍討伐に當つてゐるといふ報

せがきていた。先日、「皇軍××城を攻圍占拠し朱德等の率いる二十万を殲滅」といふような新聞記事があつたが、それは彼たちの仕事であつたかも知れない。そのようなことが露子にどのような影響をあたえてゐるかは、その美しいがどちらかといへば無表情な人形のような顔からは見取することはできない。しかし無表情であるといふそのことが、その憂鬱を表現してゐるとも考えられる。

何人が置いたところ、きりしまの植込みのあたりに、紋服を瀟洒に着こなした美貌の青年が立つてゐるが、その視線が露子の方に向いてゐるようである。彼は縁側に坐つてゐる日本画の大家の弟子であり、次の時代を背負うべき鬼才であるといわれる。その眼が、この時に露子を歎賞してゐたといふのは、思ひすごしであらうか。——彼と露子との愛情のことが人々の噂になつたりしたのは、多くの歳月が流れて日本が戦争に敗れかけてから後のことである。

瑤子と二郎たちとの中間のところに、深志野家の二人の娘たちとその夫たちとが立つてゐる。長女の伸子の夫は安仁松といつて、東北地方の大地主である。彼の亡父が神門と深志野の同窓であり、また神門が東北で鉱山を経営してゐたところに、絶えず安仁家に入つたといふことから、三つの家は長く親しい間柄であつた。それで安仁は伸子と結婚したし、——ついでにいへば、神門の露子を妻とした生月少佐は安仁の再従弟である。安仁は体が弱くもあり、

文学書を愛読したりして、ほとんど無為にただ気ままに遊び暮らしてゐる。こんども、この祝が終ると、瀬戸内海を船でわたつて九州にゆき、別府から長崎にまわり、多分鹿児島の方までゆくであらう。北の国に育つたので、かねて南の方にあこがれてゐたのである。

深志野の次女の敬子と並んで立つてゐる夫といふのは、竹井恭吉にはかならない。もちろん、さつきから竹井は、そこそこだけには決して視線を落さぬようにして、この写真の面のあちこちを眺めてゐたのである。——竹井は深志野が史学を講じていた大学の英文科に入り、出てから助手をしたのであるが、父が深志野を知つてゐた関係から、その家にも出入するようになり、二年ほど前に敬子と結婚した。深志野は竹井などを認めておらず、むしろ嫌つてゐたが、さまざまな事情から結婚をゆるすことになつた。また竹井自身にしても、はじめから、これには何かまがいがあると感じながら、これにはうようよなもの力で、結婚してしまつた。敬子にしても、そのような事情は、すぐに知り抜いたにちがいない。その二人のしらじらとした感情が、この古い写真のなかにも出てゐるかいなか、——それをしらべる心などはなかつたから、竹井はその一点からは眼をそらしつづけたのだ。ただ「一郎と瑤子とが離れて立つてゐることに、心の疎隔がすでにきざしてゐたことを見るとしても、自分がこの時に敬子と肩をつけて立つてゐることが親和の表示にはならない」

と心のなかでつぶやいた。

これらのほかに、見おぼえのある顔はいくつかあるようである。たとえば一郎の横に立っている丸い顔の中学生である。神門家の遠縁の少年だが、竹井は英語を教えたことがある。彼は五年ほど後に海軍の特政隊に入つた。戦争を生きのびはしたが、身をもちくずして、刑を受けた。

「しかし、それはそれとして、もう一人ここにいってもいい人間があるではないか……」というような声が、どこからとなくひびいてくる気がした。それは山原鹿一という、神門のただ一人の男の子のことである。神門は、まだ東北の鉱山で苦勞していたところに、近くの安仁家に入りするうち、その小間使に鹿一を生ませた。

それからまもなく関西に帰つて成功したのであるが、その場合の某財閥の後援の「条件」のようなものの一つとしては、故あつて縁遠かつた某家の娘——つまりいまの千代子夫人と結婚しなければならなかつた。それで鹿一はながく放置され、東北の田舎で中学をおえてから、ようやく京都に引取られたが、それも公然と親子の名乗をするのではなく、殉職した旧部下の息子であるなどという偽善的な話がでつち上げられ、深志野家にあづけられて学僕のようにはたらかされた。そのうち大阪の工業の大学に入つたが、衝動的なところのあつた鹿一は、いつのまにか露子にはげしく恋をするようになり、しかし生月武志の出現によつて絶望的な羽目に落ち、自

暴自棄になつて乱暴をはたらき、追放された。この還暦の賀のころには、兵隊になつて大陸に行つていた。

2

もう一枚の写真がある。

どういう理由で竹井夫婦の手元にまぐれこんできたのか分らないが、瑤子と露子とが広間で舞を舞つてゐるところである。それは日暮近く、春の日が冴えて白昼よりも美しくかがやくひと時に撮られたものか、それともフラッシュをたいて撮られたものか、またそれは、こうした余興のかずかずのうちの、最初のものであつたか、中ごろのものであつたか、そういうことについての記憶はない。舞は、八千代獅子とかというもので、琴をならしたのは神門夫人ではなかつたかと思うが、それも定かではない。ただ一つ、瑤子が紫地の着物で白い布をもち獅子頭をもち、露子が白地の着物であかい布をもつた、ということが、かなりあざやかに心に浮び出てくる。それから、この写真の背景にぼんやりと見えてゐる二つの花瓶についての、その後の対話についてのおぼえがある。

その踊がおわつたころだつたか、とにかく祝の盃をさすために、竹井は神門の近くに行つてしばらく坐つてゐたことがあつた。その時に神門が、日本画家だつたか住職だつたかに向つて、「北京で見つけてきたものです」といつて、その一つは黄色の、一つは青色の、明代の大花瓶

をゆびさしてゐた。どちらにも、ゆたかに桜の花がさしてあつた。画家だか住職だかが——いや、もしかすると傍にいた深志野だつたかが、年経れば癖は古いぬ然はあれど花を見れば物思もなし

という歌を口にして、「もちろん、まだ年経ればなどというのではありませんけど、芽出度さにかけて」といつた。

「いい歌ですね。どなたのものでしょうか。聞いたことはあるようですが、不調法で忘れまして」と竹井に盃をかえしながら、神門はだれにとなくたずねた。

「太政大臣良房でしたか」と、だれかがいつた。「御女の染殿の^{うしろ}前に桜の花瓶にさされたのをごらんになつて、というのです」

「もつたいない、もつたいない」強い意志と闘争欲と同時に謙遜さも持つてゐた神門は、しきりに恐縮した。

「ただ、このはなやかな芽出度さと、このうつくし桜の花瓶とは、あの歌を思い出させてなりません」と、これはたしか、その時に傍にきていた若い画家が口にしたことであつた。

そのように時が流れてゐるあいだにも、余興がつづいてゐた。神門夫妻と深志野夫妻、そして安仁夫妻とが、鶴亀を謡つたということ、また酌にきていた祇園の女たちが何かの踊をしたことが思い出される。それから敬子がピアノを弾いて、親戚の中の若い子たち、——数人の中

学生と女学生とが、混声で「野薔薇」をうたつたことも浮ぶが、その中で後に特攻隊に入つた少年の声がきわめて美しかつたと心に残つてゐる。

「生月少佐どのの蜜声がきけぬのは残念だ」と会社のだれかがそれらの進行のあいだにいつた。

しかし、ほとんど反応はなかつた。生月の不在のことを神門家の人に、ことに露子にいま思ひ出させるべきでない、と誰しも考えたのであらう。

アンダーソン氏——それがアメリカ人技師の名だつた——は、そのうち約束があるといつて辞して行つた。その後で深志野は、彼は日本の工業力の秘密調査にでもきたのではないのか、と神門に注意をうながした。そういう男とうかうかと交際するのは危険であるというのであつたらう。

「いや、以前からあの人たちとの連絡提携があつたればこそ、日本の若いアルミニウム工業が、どうにかここまで成長したのだ」と神門はいつた。

それから彼は、昨秋彼が満州北支中支で見聞したかぎりにおいては、日本の戦争遂行と対外関係との問題は、由々しいものを前途にはらんでゐるに思われる、とやや低い声でいい、それに、さつきのアンダーソン君にしても、好意のあまりから、そのようなことで日本のために深く憂慮してくれており、何かの道によつて、日本の現在の行き方を変えることはできないだ

らうか、と心配もしてゐたのだ、とつけ加えた。

——神門が、彼の事業が戦争によつて肥厚してゆくことと、この情勢の前途についての危惧といふこととの矛盾を、どのように内心で受けとめてゐるかは分らなかつた。深志野は不興氣に横の方を向き、住職の方に盃をさした。住職は、さりげない表情をしていたが、むしろ神門の言葉をかなりよく理解したのでないかということ、は、その眼の色からも感じられた。彼は神門よりも年上だつたが、神門がその後、敗戦による事業の崩壊、朝鮮戦争による再建、という大きな浪をくぐつて、昭和二十八年に没した時にもまだ豊饒たる八十の老僧として、その葬儀を取りおこなつた。

代議士その他政治家らしい数人が、いましがたラジオが知らせたらしい何かの戦果についてわめくようにしながら盃を持つて近づいてきた時に、竹井は立つて縁側に出、それから庭におりたが、その後にも、広間では談笑のあいだに、なおさまざまな余興がつづいてゐた。ようやく暗くなつた庭のあちこちには提灯がとまり、そのいくつかの下には模擬店があつて、芸妓たちが酒や食物をすすめ、主に若いものたちが、それぞれのもわりにむらがつてゐた。いちばん隅の、池のふちの木立のかげで、一郎が一人の舞妓を相手にしながら酒を飲んでゐた。もはや酔つてゐるということは、近づくときすぐに分つた。

竹井を見るとしやべりはじめた。「だれかが教えてくれたが、ほんとうにばかな

ことを——良房とか染殿とか桜の花瓶とか、しやべつたやつがあつたのかね。何というおべつか使いだらう。いや、それとも、すでに思い上つてゐる神門のおやじを、ひそかにからかつたというのか。どちらにしても、ふざけるのでもいい加減に願いたいものだ。とんでもない良房や染殿だ。こんな家など、吹けばすぐ飛んでしまふだけのものだ。あまりばからしいから、竹井、これからどこへ飲みにゆこう」

「しばらくすれば、出てもいいが」「いつたい君は、芽出度がつてゐるのか、このさわざを」一郎はからみつくようにいつた。

「そうではないが、そう感じてゐる連中の邪魔をしようと思わない」

「例の、傍観者というやつだね」と一郎は飲みながらいつた。「とにかく出よう。おれは出たい。おれはこの状況を嫌悪する。あたかも、君がおれの妹と結婚して——つまり深志野なる似非学者の婿になつたことが過失であつたごとくに、おれが瑤子と結婚して神門の婿になつて飛行機の羽根をつくつてゐることも過失だ」

「いまさらいつても及びのつかないことだよ」と竹井はこたえた。

「さあ出よう」一郎は竹井の腕をとつた。「おれは、じつさいはここから永久に出てしまいたいのだ。こんなところは、俗物の二郎あたりに任せておけばいいのだ。いや、待て、もしここにある男が——つまり山原鹿一が、このすべては自分のものだぞ、といつて乗りこんでくると

すれば、もうどうすることもできぬではないか」

「君は氣が弱いだね。そんなことをいわないで、堂々と神門家とその事業との継承者になれればいいのではないか」

「君がなりたけや、英語教師なんかやめて、飛行機の胴体でも羽根でもどどんつくれ。おれはもともとごめんだつたんだ。おれは経済科なぞゆきたくなかつた。もつと好きなことをして暮らしたかつた。いや、大学へなど入らないで、絵でも描いていたかつた」

広間では、近くの宇多野のあたりの農民たちが祝にきて、謡をうたつていた。その素朴な趣が、いままでのどの余興よりも、心に触れたらしく、ほとんどみなのがその方に行つていった。そのあいだに一郎と竹井とは、門を出て街の方に向つた。

3

その昭和十四年のころ、竹井は京都のいくつかの学校の英語教師をしていたのだが、まもなく、友人の尽力によつて、東京に出て、いまの学校の教師になることができた。深志野家その他のある京都は、息苦しすぎたのだから、これでいく分かは自由が得られると思われた。

神門家の事業は、戦争の進行にともなつてますます隆盛になつてゆくようであつた。深志野博士の名も超国家主義の浪とともに高まつて行つた。

しかし、そのあいだにも何ものかに蝕まれるような変化が、徐々におこつて行つた。まず一郎のことであつた。兵隊に取られそうになつた時には生月たちが介入してのめられたが、そのようなことを契機にして、彼は満州に行つて、神門が関与していた軽金属会社につとめることになつた。瑤子と娘とは、京都に残して行つた。

おそらくそこでの生活は乱れたものだったのである。そのことが間接の原因になつたのである。ところが、昭和十七年の暮に肺炎におかされて急死した。その後しばらくしてはじめて、彼には、瑤子と結婚する前に愛人があつたということが分かつた。その相手は、すこし年上の戦争未亡人であつた。彼女は、神門家の遠縁であり、十四年の還暦の賀に「野薔薇」をうたい、後に特攻隊に入つた少年の姉であつた。彼女があつた時に出席していなかつたことにも、何かの意味があつたのかも知れなかつた。

神門深志野両家の人々の中で、もつともよく一郎を理解していたものは、瑤子の母である神門夫人であつたといわれる。彼が中学から美術学校にゆこうとし、父の強い反対で挫折した時、そのことに同情したのは彼女だけであつた。もちろん、そのようなことはまつたく無関係にちがいないが、その次の冬、脳の出血をし、宇多野の家から病院に運ばれて亡くなつた。戦況もはや悪化してしまつており、神門の苦悩は大きかつた。

二十年の春には、瀬戸内海沿岸の、彼らの工

場は、ほとんど生産力を持ち得ぬものになつてしまつていた。彼の神戸近郊の家は焼けた。神門は氣力をうしなつてしまつて、敗戦をむかえなければならなかつた。二十一年の冬には、瘦せおとろえていた深志野博士が狭心症でなくなつた。追放になつてはいしたが、自分がまちがつていたなどと認めることをせず、一切の戦後のアメリカ化について憤慨し、したがつて反共の道からしてはアメリカと結んで国家主義を復活するほかない、という絶対多数の日本の保守主義者の意見に同調することができず、孤立不遇のうちに死んだ。彼を頑迷固陋だと笑うものもあり、それはそれなりに立派だつたというものもあつた。——竹井は、その深志野に同情することはできなかつた。しかし戦争のあいだ、微用されたまま南方や中国を歩いたりして、あいまいなごまかしのその日暮しをして過した自分が、それにも劣らず恥ずべき存在であるということもたしかであつた。

深志野の死のころに、その長女伸子の嫁いだ安仁家は、農地改革によつて根こそぎ産をうしなつた。安仁は病弱の身ではたらくことができず、伸子が近くの中学の音楽を教えているということであつた。

そのころに、敗戦を大佐として南方でむかえた生月武志が、かろうじて戦犯となることだけはまぬがれて、引揚げてきた。彼の郷里の家も、安仁と同様の地主だつたので、その兄は貧しくなつていた。彼は、戦争以来京都にあずけてい

た露子はそのままにして東京に出て、部下たちと「物産会社」と称するものをつくつたが、それはすぐにつぶれた。そこで一時は街裏にうらぶれて暮らしていたが、もともと彼は英語がよくできたので、アメリカ軍の調査の仕事に使われるようになった。さらにそれから日本の軍備再建の頭脳になつて返り咲くことになるのだが、それは何年か後のことであり、それまでに露子が急に何かの熱病になつて亡くなつた。

彼らの結婚は戦前戦中戦後を通じて、十年ほどつづいたわけではあつたが、その間にいつしよに住んでいたことは、合せて何カ月というほどのものでしかなかつたろう。赭顔で体のたくましい生月が参謀肩章をつけ、それに蒼白でなよなよとした露子が寄りそつている写真もあるが、その対照は印象的である。一つの絵のようであるといつてもいい。しかしそれが幸せな結婚を意味していたかどうかは別のことである。生月の方は、青年士官のころ安仁家の紹介によつてたまたま神門家を訪ねた時に、彼女を見ると、すぐに結婚の申込をしたほどだから、露子に恋をしたのちがいがいなかったが、しかし彼女とつては、それよりも戦争の功名の方が大事であつたということには、ちがいはない。神門家の方には、軍人と結ぶという政略的な動機もあつた。露子は当時の軍人に一時的に眩惑されたとしても、それがただちに愛情を意味したとはかぎらない。戦争の末期ごろから、することもなくなつた彼女が、日本画を習いはじめ、鬼才

といわれた美艷な画家とのあいだに——彼には妻子もあつたが——何かのことが起つたとしても、ふしぎでないことだつたろう。それは戦後までつづき、帰つてきた夫は落ちぶれており、気分も變つており、一方で画家の家庭は紛糾してきた。そのような時期に露子が——戦争末期から胸を悪くしていたのではあるが、急に死んだために、その死因について疑うものも出たのであつた。

この暗い時期に、それでもさすがに、神門清造は、しだいに絶望の底から立ち上ろうとして努力しており、それに力を合わせたのは、四十年代に入り野心にみちてきていた深志野二郎だつた。

工場は焼け、原料も市場もなく、——昭和二十年ボーレー賠償案の報告は、日本の一切の軽金屬製錬と加工とを禁ずる、というのであり——まつたく手のつけようもない状態だつた。しかし神門はその敗戦後のどん底で、かつて東北の鉱山採掘に行きつまつて、自殺しようとした時のことなどを思出しながら、ある時に二郎に向つていつたということである。

「借金取りに追いまくられるように山をうろつき、雨のふる晩方に、峠の下の淵に身を投げようかと思つた時に、ちょうど通りかかつた木樵が声をかけてくれた。それからその小舎に引つばられて、山の獣の肉なんか食つてどぶろくをこちそうになつているうちに、その山男の呑氣さが、わたしの肝に乗りうつてきたのにちが

いない……わたしは生き抜いてみることにした」

「とにかく伯父さん、動きさえすれば何とかありますよ」と二郎は答えたということである。

アメリカの方針は、そのうち、少しずつ緩和されて行つた。——戦後の経済の世界に繰りひろげられていたこと——官庁や公団のもつ切符の争奪、そのことによる物資の争奪、それを指をくわえて見ているのは愚であつた。深志野二郎はそこに飛びこんでゆき、顔のひろい神門翁の指令を受けながら、関西と東京との間を目まぐるしくゆききし、善悪をこえてたかつて、しだいに事業の恢復の方向に歩いて行つた。そのうち——生月たちの軍備再建のうごきが新聞にも出るような頃になると、輕金屬の世界にも、新しい情勢がひらけてきた。アメリカによる禁

圧は解けたどころか奨励されるようになった。カナダやアメリカのコンツェルンの代表者たちが、日系二世などを使いながら、はたらきはじめた。その中に、戦前の友人アンダーソン氏の弟がくるという情報を得たことは、神門と二郎とを狂喜させた。連絡はすぐについた。弟アンダーソンの語るところでは、兄アンダーソンは、太平洋の空中戦でその息子を失つたということだつたが、戦争中も、神門に対してはつねに好意をよせ、戦後はその運命について案じていてくれたそうである。現に弟アンダーソンはその兄の紹介状を持つていたから、それはお世辞ではなかつた。

そのうちに朝鮮戦争がはじまる。神門たちの工場は新に建ち、しきりに煙を吐く。アンダーソンの代表する会社との提携が成立する。半数の株を持たれ、技術をにぎられ、販路は指定され——日本の製品は小さな困難なところにしか持つてゆけず、またアメリカの社に送る材料のアルミは日本での相場の二分の一または三分の一の安値でしか取つてもらえないが、完全な敗戦の今日の条件としては已を得ないことであつた。アメリカの後楯によつて、しだいにアジアの各地に市場をひろげてゆくこともできるという希望はあるし、また、きわめて近い将来には小銃の部品や兵隊の飯盒などを、それからやや遠い将来には飛行機の資材を、ふたたびつくることにもなるであらう。不利な条件を課せられていゝとしても、事業そのものの規模は、以前よりもはるかに大きなものになつてゆくのではない。

神門翁の身边は、多くのものに先立たれて、まつたく寂しくなつてはいたが、その仁和寺裏の邸は、少くとも表面だけは、昔にもましてにぎやかになり、人の出入りも多かつた。竹井は行つたことはないが、春ごとに花見の宴がいつそう華やかにひらかれるということであつた。

しかし、そのような状態は長くはつづかず、昭和二十八年の早春に、神門は七十代の半ばで亡くなつた。病氣は、かなり急激に進行した癌であつた。賀筵から十四年目である。

4

神門の葬式の写真一枚ある。

寺院で行われている。竹井はゆかなかつたら、この写真では、どこかの寺か分らない。その時には聞いたはずだが記憶は消えている。すでに神門は、顧問ということになり、ほとんど事業から引退していたのだつたが、それでもつばな式であつたということは、この写真に見える僧侶や花や弔客の数からも知ることができ、いつかの賀筵にきていた老僧の頭部も見えている。

竹井に近いものといへば、深志野末亡人、伸子（安仁はこなかつた）、瑤子母子、深志野二郎とその妻と三人の子供、生月武志、それから竹井の妻の敬子である。列席者の中に、人に半ばかくれて一人の外人の姿が見えるが、それが弟アンダーソンであらう。

竹井は、ちやうどそのころ、九州の方を旅行していたのである。その地方の新聞に神門の計報が出たか出なかつたか、それは分らない。出ていたとしても、旅であつたから見おとしたのであらう。妻からの連絡がついた時には、もはや葬式には間にあわなかつた。せひゆかなければならぬといふほどに近い間柄とも考えられなかつたが、とにかく旅の予定をすこし切りあげて京都に向つた。

朝に神門の邸に着いた。ちやうどその午後、二日前の嵯峨の奥での埋葬には従いてゆかなかつた女たちが、その新しい墓にまいにゆくと

いうことであり、竹井も同行をすめられた。深志野夫人、伸子、敬子、瑤子、華子であつて、二台の車に乗つて出た。その帰りに大沢池のほとりで彼が撮つたもの、広沢池のほとりで偶然にゆき会つた東京での知人のカメラマンが撮つたもの、その二つが、同じ頁にならべてはつてある。墓地でもうつしたはずだが、紛失している。

墓地は嵯峨の奥のある古い寺の裏にあり、一方に杉林があり、その他の方を雑木林と竹林とでこまれた斜面で、晴れた春の午後ではあつたが、陰湿な空氣がただよつていた。それでも竹林のかげの、花がほとんど散つた梅林のあたりでは鶯が鳴き、杉林のふちには三本ほどの椿が、花をひらきかけていた。新しい神門の墓、それから夫人や露子たちの墓をおがんだ後で、瑤子が椿の花を見ながら深志野夫人にいつた。「まだ椿寺の椿は咲かないでしようね。父は今年も見にゆくといつていたんですけれど」

「ああ、お父さんは毎年見に行つてらしたのね」夫人はいつた。「今年は、まだ十日もしなければ、あのきれいな五色の花もひらかないでしょう」

「そういえば」と伸子がいつた。「いつかの、還暦のお祝の時にね、あたしが近くでお酌していると、すこし酔つていた伯父さまは、お客のどなただつたかに、——そうそう、ちやうどあの太政大臣良房の歌だかが出たしばらく後のことだつたけど、もし何でも欲しいものをやると

いう人があつたら、私は何を措^{はか}いてもあの椿を、この庭に持つてきて植えたい、とこうおつしやつてたわ」

「酔つて大それたことおつしやつたものね。太閤様じやあるまいし」と夫人はいった。

「でも、あの花が好きなのは、伯父さんだけではないわ」と華子はすこし京訛のある言葉でいつた。「ね、瑤子さん。あれは去年の春だつたかしら。アンダーソンさんが、世界中のどの薔薇よりうつくしい、つていつたわね。ほら、いつしよに見に行つた時に……」

「とてもお世辞ね。もつともお連れもよかつたのね」と敬子がいつた。

瑤子はやや暗い顔をして、わきの方に眼をそらした。アンダーソンが瑤子を好きになつて付きまとつてゐる、ということ、いつか敬子は竹井に話したことがある。その後で「お気の毒ね」とつけ加えたが、それは瑤子が気の毒だという意味だつたか、それとも夫が瑤子に何かの感情をもつてゐるのでないかと推していつたことなのか、分らない。

森かげから出ると、ふかぶかと茂る円い小倉山の上の空は、明るい白雲をうかべながらあおく冴え切つて、まぶしく光つてゐた。寺の庭のあたりの山桜の枝には、ところどころ花が白くひらいてひるがえつてゐた。路ばたの雑木林には黄色な粉のような芽がいちめんに出ており、足もとの草の中にはすみれの花が咲いてゐた。このまま家に帰るのは惜しいという心になつて、

二尊院、厭離庵の方にまわつた。二尊院の参道のもみじはかすかに芽ぶきはじめ、桜の梢はちらと白く光つてゐた。厭離庵の苔のむした庭の垣のほとりて夫人がいつた。

「あれは戦争の最中のころだつたか知ら、神門さんとこと、うちとで、ここで小さな茶の会をしたのは。華子さんおぼえていて？」

「あたし忘れたわ。露子さんがお相伴だつたのじやなかつたんでしょか」と華子はこたえた。「定家卿と、うちの父さんと神門の伯父さん——おおよそ似ても似つかないわ」と敬子が笑つた。

「そういつたものでもないわ」夫人は娘の敬子をとたしなめた。「深志野はとにかく、神門さんは風流でもあつたのよ。それに敬子だつて、それならこの小倉山のあたり厭離庵で定家卿がうたつた春の歌の一つもいつてごらんさいといへば、困つてしまふでしょう」

「クイズじやあるまいし」と敬子はいい捨てた。「瑤子さんならできよう」と夫人はいつた。

「さあ」と瑤子はいつた。知つていてもいわなかつたのかも知れない。

「竹井さんは？」夫人がいつた。

「まつたく知りません」と彼は頭をかいた。

「どんなのがありますの？」と華子が夫人にたずねた。

「そうね『しら雲の春はかさねてたつた山をぐらのみねに花にはふらし』というのは、少くともこのあたりのものだわね」

「その歌は明るいようだけど、この『厭離庵』というのはどんな心持だつたんでしょか」と伸子が母にたずねた。

歌人であり、また夫の深志野博士のよい話相手でもあつた夫人は、娘たちにおしえた。「あのころは、一つの末世だつたのね。ほら『紅旗征戎吾が事二非ズ……』などと戦争を厭つた手記もありますからね。それから後、鎌倉の世になると、定家自身の公卿生活はともあれ、この京都の内外には、飢えて死んだものの死骸がころがっており、群盗が横行するという状態だ、と定家は悲観してゐるのですよ」

「やはり戦後、ということだつたのですのね」と伸子がいつた。貧しくなつた地主の妻の彼女は、この中でもつとも強く戦争の苦しみを知つてゐるのであろう。彼女だけが、日に焼け、鄙び、年取つても見える。

……その時ふと竹井はいつかどこかで、だれかの口から「紅旗征戎……」の言葉をきいたことがあると思ひ、しばらく首をかしげた。すると、急に眼のまえに、この嵯峨の奥の化野のさむぎむとした冬ざれの眺めが立ちあらわれる心がした。——枯木林のなかにあられの玉が音を立ててふりこむかと思へば、山の上の灰色の雲がたちまち切れて澄んだ冬日がいちめんに、林のむこうの大竹やぶにそそぎ、竹の葉は眼にしみるほど青々と光りながら鳴りぞめく。しかし、たちまちまた曇る。山清水のながれる径をのぼつてゆくと、暗い常緑木の森のなかで小鳥が鳴

きさわぐ、山おろしの風が吹きつけ、またあられが落ちる。径を行つてゐるのは、竹井と、深志野一郎と伸子、敬子と、一郎の友人の水間経雄とである。——十年も前のことであつたから、

みながひとりものであり、あるものはまだ学生であり、あるものは、学校を出たばかりである。経済科を出て神門の会社に入つてゐた一郎が、

東京の大学の国文科を出た水間に、

「徒然草に化野というのがあつたつけ」とたずねる。

白暫でうつつくしい顔の水間は、はにかんでこたえない。

「あたし、こないだおぼえたのよ」と伸子がいう。「化野の露消ゆる時なく、鳥辺山の煙立ち去らでのみ……というのよ」

「念仏寺というのは、こつちでしようね」と水間がいう。竹井は、さつきから、だまりこくつて、暗い顔をして歩いてゐた。いつたい、おれは何のために、みなに従いて、わざわざこまできたのか——。

今日のひるすぎ、大学院にゆくために、下宿を出て、西京の、ある電車の停留所までくると、向うから深志野の三人の兄妹——一郎と伸子と敬子とが、もう一人見知らぬ同年輩の青年（それが水間経雄であつた）と電車をおりてくるのに出あつた。

一郎はすぐに竹井を見つけて声をかけ、これからいつしよに嵯峨野をあるかないか、とさそつた。竹井は、大して乗気もしなかつたが、い

つものながら退屈な大学院の講義をきくよりは、この男女の仲間と、郊外をあるくことの方がおもしろい、と思つた。それにしても、この北風が突き刺し、しかもしんと底冷えする冬の目をえらんで、嵯峨野をあるこうとは、いつたいどういう意味なのか、とふしきに思つて、竹井は一郎にたずねた。

「ああ、紹介する」と、一郎はいつた。「こちらは水間君。ぼくの中学校のときの友だちで、いま東京の大学で国文をやつてゐる。論文を書くために、急にやつてきたのだ」

そのあとで聞き知つたことだが、水間経雄は、京都のある公卿華族の一族で、中学時代は、深志野一郎と同級だつた。家がそのち東京にうつり、東京で高等学校大学に入つたが、一郎との交際はつづいてゐた。それであつてみれば、いま水間と一郎兄妹とが水間の研究にしたがつて、京都の郊外を歩こうとしてゐるのはふしぎなことではない。

電車で嵐山にゆき、それから天竜寺、野の宮、厭離庵、祇王寺、二尊院などあるくのだつたが、もとより水間は少年のころからこのあたりは知つており、それと彼がいま研究している、平安朝鎌倉期の物語や日記隨筆の類と、くらべ合わせてゐるのであつた。彼がそれらのことについて、つづましく語るにつれて、一郎と伸子敬子とは、聞き惚れるように耳をかたむけた。

竹井は、田舎から出て、「英文学」というものをこの京都でならつてゐる男にすぎない。い

ままで、この嵯峨野など足をふみ入れたこともなかつた。まして、この野や山や寺や庵を知ろうはざるなかつた。いつのまにか彼は、仲間はずれになつてしまつてゐた。しかし、心の中では、こんなわびしい野山に、何か曰くありげに感嘆してゐる彼らこそ、結局世界の目から見れば、「田舎者」にすぎないのだ、と反撥し、軽蔑しかへしてゐた。——それにしても、日ごろは、アメリカの映画や、ダンスに熱中してゐる敬子までが、水間の一言一句に耳をかたむけてゐるのが、おかしくてならないと思つた。しかも、竹林にきらめく日の光を見、枯林にうちつけるあられの音を聞いているうちに、いつの間にか自分も、知らずしらずそのようなものの魅力にとらえられてゆくのに、彼は不自然な抵抗をしなくてはならなかつた。

念仏寺にゆく、化野の山径であつたか、水間は、「紅旗征戎吾が事ニ非ズ……」という定家の言葉をみなに話した。——もはや満州事變が、中国本土への侵略にうつろうとしてゐる時であつた。それを聞く四人の若もの心には、この厭戦の言葉がつよくひびいた。

念仏寺の、数百の無縁仏の石塔のうえに、冬のうすら日が、つめたなく澄えて白々と照り、風は山辺から低く音を立ててふきおろし、その石塔の中を吹きぬけ、またうずまいでゐた。石垣のかげの一株のまじりやうの赤い実がその風にゆれていた。

水間は石塔の中に立つてゐた。そのかたわら